

令和4年度

事業 報告書



世田谷

ひきこもり相談窓口「リンク」



目次

はじめに

第一章 事業概要

第1節 世田谷区ひきこもり施策

1. 国の動きと世田谷区の動き
2. ひきこもり相談窓口「リンク」開設までの経緯

第2節 ひきこもり相談窓口「リンク」について

1. 「リンク」窓口相談の流れ
2. 支援のネットワーク
3. 重層的支援協議会
4. 「リンク」窓口概要

第二章 事業実績

第1節 利用者実績

1. 相談者件数
2. 当事者件数
3. 相談者・当事者利用サービス

第2節 開催会議・多機関連携

1. 重層的支援協議会・部会
2. 重層的支援会議(「リンク」検討会)
3. 個別ケース検討会議(支援会議)
4. 医療連携(事例検討会)
5. 連携機関一覧

第3節 その他の取組み

1. 展示会
2. 就労準備支援事業の活動紹介

第三章 事業評価

第1節 事例報告

1. 当事者につながった事例
2. 多機関が会議を経て連携した事例
3. 世帯分離した事例
4. 親亡き後一人取り残された事例
5. 一歩を踏み出した事例

第2節 「リンク」関連機関および利用者の声

1. 連携機関からの意見
2. 利用者の声

第四章 広報・啓発

第1節 研修会開催と「リンク」紹介

1. 8050問題研修会
2. 「リンク」説明

第2節 家族会・当事者会との連携

1. 家族会
2. 当事者会
3. 「かたら~な」

第3節 「リンク」キャラクター

第五章 総括

第1節 令和4年度の取組み状況

1. 「リンク」内の協働
2. 多機関との協働
3. 相談者の思いと制度の活用

第2節 令和5年度に向けて

1. 目標とする取組み
2. スタートしている令和5年度への取組み
3. より良い支援体制に向けて

はじめに

新型コロナウィルス感染症の影響がまだ収まりきらない令和4年4月5日に世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」を開設して丸1年が経ちました。

ひきこもり相談窓口を掲げたものの、相談が来るのだろうか、との心配をよそに、開設当初からご家族、ひきこもりの当事者、福祉保健の関係機関の方から相談をいただき、多くの方とつながることができました。

ひきこもり等のサポートについて国や都が包括的な体制の整備を進める中、世田谷区では、平成30年に立ち上がったひきこもり家族会「はなみずきの会」やひきこもり当事者会の方々が地域で活動される中で出てきた、相談したくてもどこに相談をしていいかわからない、といった声を受けて動き出しました。平成31年には、内閣府「生活状況に関する調査」で中高年（40～64歳）ひきこもりの推計値が発表され、ひきこもりの問題が若者だけではないこと、また区内のひきこもりの方が若者（15～39歳）と合わせると推計で約9,200人を超えることがわかりました。区も独自に「ひきこもり実態調査」を行い、その結果も踏まえて令和2年度に「世田谷区ひきこもり支援に係る基本方針」を制定しました。基本方針の中で、支援については、若者支援のメルクマールせたがやと生活困窮者自立相談支援センターぶらっとホーム世田谷（以下、「ぶらっと」という）が共同で窓口を運営することになりました。この2機関の組み合わせが生まれた背景には、以前からぶらっとでは70、80代の高齢相談者が40、50代のひきこもりの子どもとの生活費を得るために增收を求めて就労を希望されたり、親亡き後の子どもの生活を心配する相談があり、ひきこもり支援には医療保健面だけでなく、福祉の相談も含めて生活全般に支援が必要なことが明らかになっていました。そこで、メンタル支援の専門家である臨床心理士等のメルクマールせたがやと、生活全般の困りごとの相談を受け付け、また、地域の福祉関係機関とつながりのあるぶらっとが、連携、協働して、重層的に支援を行う「リンク」の仕組みが考案されました。1年間の相談を通してこの仕組みの強みを發揮しながら相談・支援を進めることができました。この2つの相談・支援機関を合わせた世田谷区の取組みは、ひきこもり支援の一つのかたちとしてとても有意義なものだと認識しています。

1年間にお受けした相談は、ひきこもり当事者自身の病気や障害などの様々な生きづらさの問題だけでなく、家族の健康や関係性の問題、虐待、家計問題など多岐に渡ります。また、長い間相談することができず、厳しい状況を家庭内で抱えており、家族全体が力を失った状態になっていることが少なくありません。今後も、「リンク」ではこうした当事者や、ご家族の相談に、まずはお話を伺い、一緒に課題を解きほぐしながら、ひきこもりのご本人の気持ちに添った生活の実現に向け、その方のペースを尊重しながら、サポートに取り組んでまいります。

令和5年6月
ぶらっとホーム世田谷センター長 田邊仁重

令和4年4月5日、世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」が開設いたしました。「リンク」の特徴は、ぶらっとホーム世田谷とメルクマールせたがやの2機関が、協働して支援にあたっていることです。2機関が一緒になって来所相談や訪問相談、関係機関との会議に参加しています。

メルクマールせたがやは、これまで区内在住の生きづらさを抱えた若者の総合相談窓口として活動しておりますが、相談の多くは若者のひきこもりに関する相談でした。活動を続ける中で、早期支援の重要性から教育との連携に注力してまいりました。「リンク」は年齢上限のないひきこもり相談の窓口のため、40歳以上のひきこもり支援の経験のない私どもにとって、ぶらっとホーム世田谷とのタッグは、視点の広さやケースワークの動きから学ぶことが大変多くあります。支援の初期段階から2機関で知恵を出し合いながら対応に動けることは、支援者間での支え合いも生まれ、支援に厚みが出ていると感じています。

引き続き、ぶらっとホーム世田谷と力を合わせて、ひとりでも多くのひきこもりや孤独・孤立状態にある当事者やその家族とつながり、当事者の方々が自分らしく地域で暮らしていけるようサポートしてまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ致します。

令和5年6月
メルクマールせたがや施設長 廣岡武明

第一章

事業概要

第1節 世田谷区ひきこもり施策

1. 国の動きと世田谷区の動き
2. ひきこもり相談窓口「リンク」開設までの経緯

第2節 ひきこもり相談窓口「リンク」について

1. 「リンク」相談窓口の流れ
2. 支援のネットワーク
3. 重層的支援協議会
4. 「リンク」窓口概要

第一章 事業概要

第1節 世田谷区ひきこもり施策

1. 国の動きと世田谷区の動き

■ 国の動き

ひきこもりの定義と調査による推計について

平成22年厚生労働省（厚生労働科学研究）が「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」をまとめた。ガイドラインでは「ひきこもり」を以下の通り定義している。

厚生労働省定義

様々な要因の結果として社会参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態。

（他者と交わらない形での外出をしていてもよい）

その後、国が対象年齢別に行った調査にて、国内にはひきこもりの方が約115万入いると推計される。

概ね6ヶ月以上

- 自室から出ない
- 自室から出られるが家から出られない
- 近所のコンビニには出かける
- 趣味の用事のときだけ外出する

狭義のひきこもり

準ひきこもり

広義のひきこもり

内閣府「こども・若者の意識と生活に関する調査（令和4年度）」

15歳～39歳出現率2.05%

世田谷区にあてはめると約5,740人

40歳～64歳出現率2.02%

世田谷区にあてはめると約7,040人

国による支援体制整備

国は、ひきこもりをはじめとする複合化・複雑化した個人や世帯の課題をサポートしていくため、社会福祉法を改正し、すべての地域住民を対象とする包括的支援の体制整備を行う「重層的支援体制整備事業」を創設した。（令和3年4月施行）

■世田谷区の動き

世田谷区によるひきこもり実態把握調査

区内の状況を把握し、その傾向や特徴を捉え具体的な支援のあり方を検討していくことを目的に行つた。

ひきこもり実態把握調査

把握した当事者数 319件

年齢・地域等に多様な実態がある

何らかの障害を有すると思われる方が少なくない

精神障害またはその疑い56.7% 発達障害またはその疑い29.7%

長期化(10年以上)した方を支援しているケースが多い…37.6%

複合的課題を抱えている

同居家族も課題を抱えているなど、家庭内に複数の課題を抱えている

支援機関へのつなぎに苦慮している：コミュニケーションがとりづらい

会うことも困難。会えるが会話できない。本人や家族に困り感がない。

ひきこもっている子のことを話したがらない。

調査対象機関：あんしんすこやかセンター/総合支所健康づくり課/ぶらっとホーム世田谷・メルクマールせたがや
区HP：https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/kusei/002/d00190983_d/fil/2101135-8.pdf



世田谷区ひきこもり支援に係る基本方針の策定

ひきこもり支援に対する基本目標

ひきこもりの状態を含む、社会との接点が希薄な方や社会との接点
がもちづらい状況にある方とその家族が、気軽に相談・支援につな
がることができ、当事者が自分らしく暮らすことができる地域づくりをめざす。

具体的な取り組み

- ・相談窓口の明確化、支援機関相互の連携強化
- ・当事者・家族それぞれの課題やニーズに寄り添った、きめ細やかな
支援の充実
- ・ひきこもりへの社会的理解及び支援者育成の促進

区HP：<https://www.city.setagaya.lg.jp/mokuji/fukushi/003/009/d00192811.html>



世田谷区未来つながるプラン 2022–2023（実施計画）

政策の柱1「高齢者・障害者をはじめすべての区民の健康と生命を守る」のうち施策3「ひきこもり支援の推進」として、目標を定め計画の進行管理を行っている。

目指す姿

ひきこもり状態にある当事者や家族へのきめ細やかな支援体制を構築し、ひきこもりの方への社会的理解の促進を目指します。

施策を構成する事業

事業番号	事業名	事業の方向性			
3-1	ひきこもり等生きづらさを抱えた方の相談・支援	当事者の年齢に関わらず、「ひきこもり相談窓口」でひきこもり当事者や家族、各支援機関からの相談を受け止め、若者支援の「メルクマールせたがや」と生活困窮者支援の「ぶらっとホーム世田谷」が中心となって支援します。			
3-2	支援機関相互の連携強化	ひきこもり支援機関連絡協議会をはじめ、各部会や個別ケース検討会議により、複数の支援機関がそれぞれの強みを生かし、役割分担しながら支援体制を構築します。			
3-3	ひきこもりの社会的理解の促進	ひきこもりに関するセミナーや講演会、支援者に向けた「メルクマールせたがや」や「ぶらっとホーム世田谷」の事業紹介等を目的とした説明会を通じ、ひきこもりに関する認知度や社会的理解の向上を図ります。			
事業費見込み		令和4年度	138,212 千円	令和5年度	154,616 千円

2.ひきこもり相談窓口「リンク」開設までの経緯

開設までの流れ

世田谷区内で明確な「ひきこもり相談窓口」がない中、以下の各機関が「ひきこもり」の相談を受けていた。

保健福祉センター
健康づくり課
こころや体の健康



あんしんすこやかセンター
(地域包括支援センター)

ぶらっとホーム世田谷

自立相談支援機関
生活全般の相談、
家計相談(世帯全体の家計相談、
障害年金の手続き、各種債務や
滞納整理など)
就労相談、セミナー、家族会

メルクマールせたがや
生きづらさを抱えた若者支援
個別相談(本人および家族)
居場所機能、出張相談会、
家族会、アウトリーチ
臨床心理士、精神保健福祉士など
専門のスタッフが対応



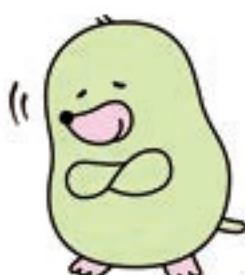
ぼーと
地域障害者相談
支援センター

当事者や家族会、区民からの「わかりやすい窓口が必要」との声を受けて、「ひきこもり相談窓口」の開設検討が始まり、「世田谷区未来つながるプラン」にもあるように、生活全般の困りごとに対応する「ぶらっとホーム世田谷」(以降「ぶらっとホーム」と表記)と生きづらさを抱える若者の支援を心理面で対応していた「メルクマールせたがや」(以降「メルクマール」と表記)という2つの機関が一緒に窓口を運営することになった。

ひきこもりの相談で想定される困りごとをまとめると以下のような図になり、複合的な課題を抱えていることが分かる。世帯の状況も変化していくため、年齢ごとに対応機関を分けない窓口のあり方が検討されることになった。



令和3年度の1年間をかけ、毎月世田谷区の担当者、ぶらっとホーム、メルクマールの各担当者が集まり、開設準備会議を開催した。会議では、支援の方針、それぞれの役割、帳票の作成について話し合った。また、令和4年度の開設にむけて2機関の連携体制や支援の流れ、関係機関との連携手順を検討した。



開設までの検討内容

【帳票について】

・相談受付票

ぶらっとホームが使用していた生活困窮者自立支援制度の相談受付票をベースに家族や関係者が相談に訪れた場合でも対応できるよう帳票を作成。

・インテークアセスメントシート

メルクマールが使用していた帳票、全国の支援機関の帳票を参考に作成。開設から、1年経過した段階で再度見直しの検討を行っている。

【受付から支援の流れ】

開所曜日や時間も異なる2つの機関が同時に対応をすることから、どちらが受付をし、情報をどのように共有するのか、相談体制を整えるための話し合いを重ねた。

【令和3年度中の試行】

メルクマールスタッフ1名がぶらっとホームでひきこもり支援の相談を同席で面談した。面談で浮かびあがった支援体制等の課題を月1回の開設準備会議にフィードバックし、2機関同席によるインテーク面談の流れや帳票の項目等について検討を繰り返しながら定めていった。

【両機関の強みを活かす】

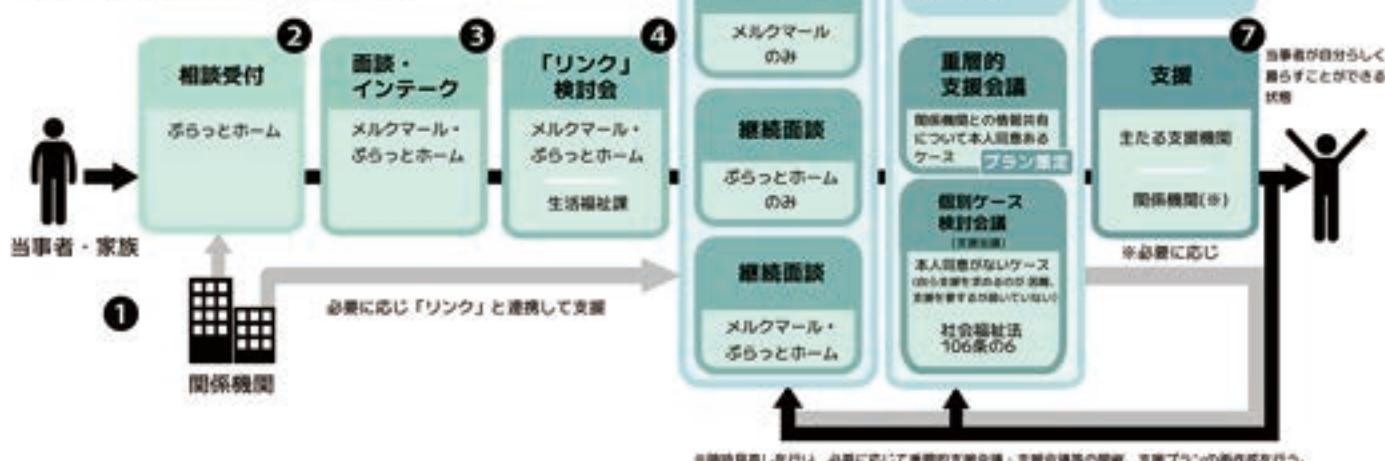
それぞれの機関がもつ専門性はもとより、就労準備や居場所などの事業も相談者の希望や要件に合うものを活用していくこととした。



第2節 ひきこもり相談窓口「リンク」について

1. 「リンク」の相談窓口の流れ

受入れから継続支援の検討まで、相談の流れは以下の図の通りとなっている。



それぞれの視点で強みを活かし、「リンク」の運営母体となって支援を行っている

- 当事者、区内家族のみならず、区内に当事者がいる区外家族や関係機関からの相談も受け付けている。
- 相談受付はぶらっとホームが窓口。電話、メール、ホームページの問合せフォームにて相談を受付、概要を聞いた上でメルクマールと相談日の調整を行う。メールのみでしばらくやりとりをする場合もある。
- インテーク面談はぶらっとホーム、メルクマールの2名体制で行う。主にインテークはメルクマールのスタッフが聞き取りを行うが、経済的な面を含めた生活面はぶらっとホームのスタッフが確認をする。
- 毎週1回、前週に受けた新規案件のすべてを区の生活福祉課担当者、「リンク」に関わるぶらっとホーム、メルクマールのすべての担当者が集まる「リンク検討会」で今後の支援方針を確認検討する。
- 検討会にて当事者が若年で経済的な生活面での不安がないケースはメルクマールが従来の支援を行い、生活面での緊急対応が必要な場合はぶらっとホームがメインで支援を行う。9割方はぶらっとホーム、メルクマール双方のスタッフが協働して関わるリンクケースである。
- 支援の経緯によるプラン策定や終結の確認、モニタリングについては年4回ほど「重層的支援会議」で話し合う。多機関での検討協働が必要な困難ケースは、個別ケース検討会議（支援会議）を開催して多機関が情報共有および検討を行う。
- 支援は前述の通りのように多機関が協働しながら支援を継続していく。

「リンク」を運営する2機関の概要

ぶらっとホーム

はだらく 就労訓練・体験 職場紹介・定期支援 キャリアカウンセリング	参加する 居場所	学ぶ 子どもの学習支援	食べる フードバンク フードパンtries
有償ボランティア 無償ボランティア		体験型セミナー 座学型セミナー	
やりくりする 損害電話貸出 貸付	家計の見える化 受取生チャレンジ	住む 住居確保給付金 物件探しのお手伝い	くるくるリサイクル
FP相談 弁護士相談 社労士相談			専門相談

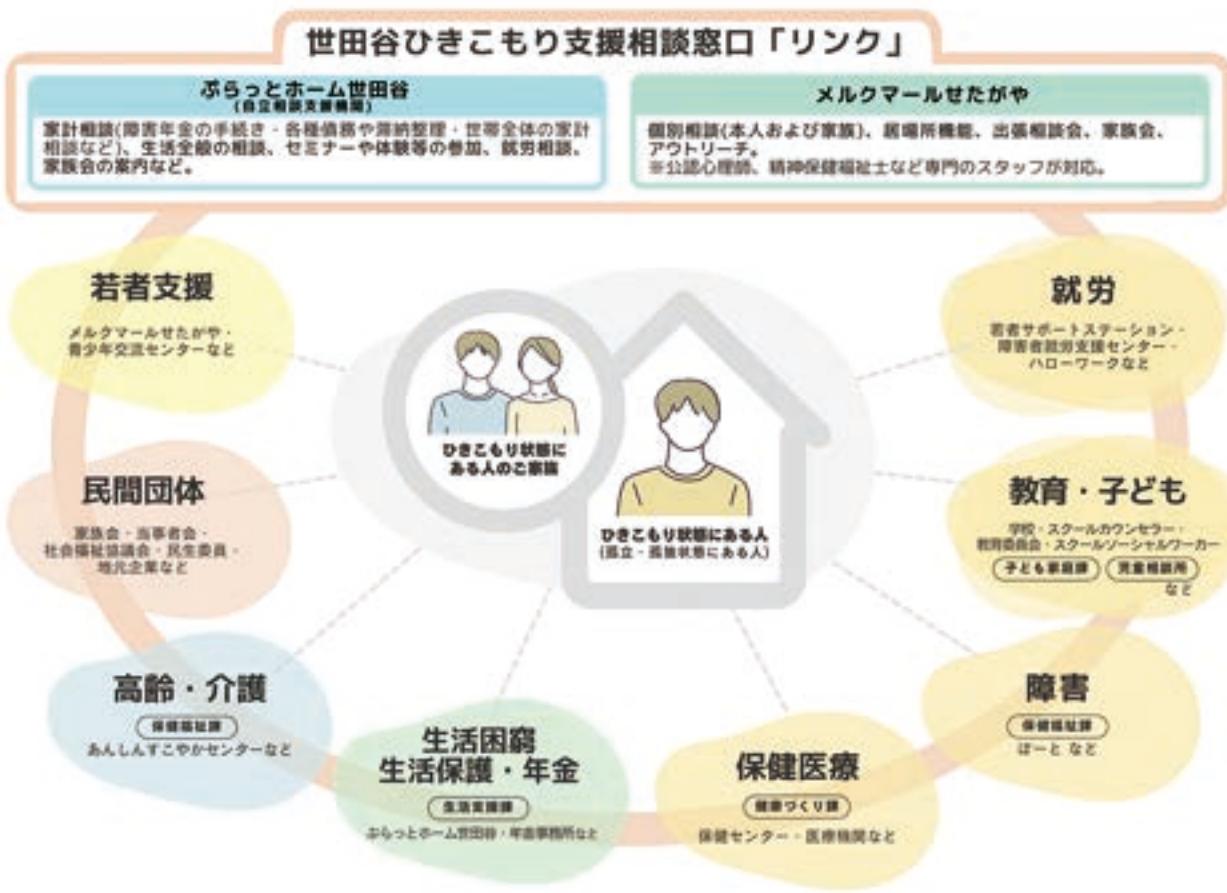
メルクマール

生きづらさを抱えた方とその家族が人や社会とつながることを目的とした社会参加の準備支援	居場所
相談 有資格者による専門性の高い相談支援 担当制による本人・家族への個別相談 プライバシーが保たれた相談環境	グループ登録制のクローズドな居場所 安心・安全の保たれた空間での対人交渉 多様なプログラムとフリータイム
家族会 ひきこもりの理解を深める心理教育的なセミナー 同じ悩みを抱えた家族同士のつながる交流会 家族からの利用の入り口	アウトリーチ 本人の尊厳を尊重した訪問相談 区民の身近な場所で相談できる出張相談会 本人・世帯のニーズに沿った他機関連携

社会参加へのステップアップ

2. 支援のネットワーク

「リンク」では、ご相談者ごとに、世帯が抱える困りごとへの対応や、本人・家族が望む生き方の実現に向け、関係機関がそれぞれの強みを活かして協力しながらサポートしていく体制をつくっていく。



3. 重層的支援協議会

ひきこもり等複雑化・複合化した課題を抱える方やその家族に対する適切な支援を図るため、社会福祉法第106条の6の規定に基づき令和4年4月に設置。

協議会は、代表者会、実務者会議、個別ケース検討会議の三層で構成され、多機関による連携・協働のネットワークが円滑に稼働するよう以下のとおり開催している。

代表者会議

- ・ 福祉・保健・産業・教育の各機関の代表者で構成。年2回程度開催。
 - ・ 協議会の運営方針等の環境整備を図るとともに、代表者間の連携を深める。
- ①生きづらさを抱えた方の支援に関するシステム全体の検討
 - ②実務者会議からの活動状況の報告や評価 等

実務者会議

- ・ 各機関の実務者による研修や検討会。2部会。
 - ・ ひきこもり・就労支援部会(年4回開催)、8050支援部会(令和4年度設置。年2回開催)
 - ・ 各機関の課題のあるケース等を共有・検討、実務者の知識向上と関係機関同士の連携強化を図る。
- ①定例的な情報交換
 - ②支援ケースに関する状況確認
 - ③個別ケース検討会議等であがった課題等に関する検討 等

個別ケース検討会議

- ・ 個別のケースについて、直接関わる構成機関の担当者会。随時開催。
 - ・ ケースごとに具体的な支援の方法を検討。状況の把握や問題点の確認、支援方針の策定・見直し、役割分担の決定・認識の共有などを図る。
- ①支援ケースの状況把握や問題点の確認
 - ②支援方針の確立と役割分担の決定、共有
 - ③実際の支援方法の検討 等

4. 「リンク」窓口概要

【窓口受付曜日】 月曜日～金曜日（祝日、年末年始は除く）

【時間】 9時～17時

【対象者】 年齢問わず。当事者、家族、関係者、関係機関

【「リンク」担当者】 ぶらっとホーム世田谷 3名、メルクマールせたがや 3名

第二章 事業実績

第1節 利用者実績

- 1.相談者件数
- 2.当事者件数
- 3.相談者・当事者利用サービス

第2節 開催会議・多機関連携

- 1.重層的支援協議会・部会
- 2.重層的支援会議(「リンク」検討会)
- 3.個別ケース検討会議(支援会議)
- 4.医療連携(事例検討会)
- 5.連携機関一覧

第3節 その他の取組み

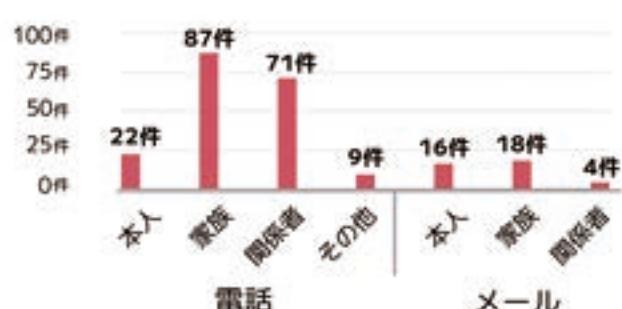
- 1.居場所
- 2.就労準備支援事業の活動紹介

第1節 利用者実績

1. 相談者件数

① 問合せ件数

令和4年度「リンク」開設後に問合せがあった件数（相談につながっていない件数含める）



方法	相談者	合計
電話	本人	22
	家族	87
	関係者	71
	その他	9
メール	本人	16
	家族	18
	関係者	4
	その他	18
合計		227

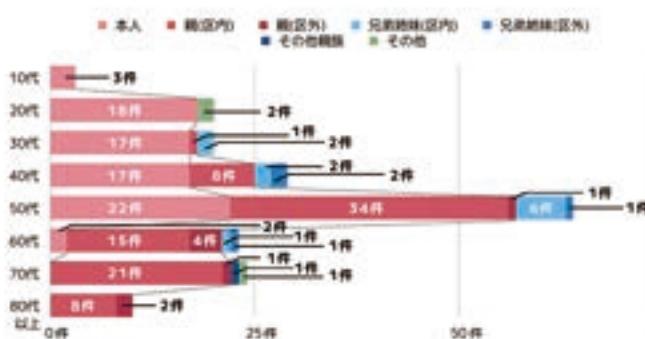
POINT

当事者本人からの問合せは電話とメールの差異はそれほど出なかった。家族からの電話問合せ件数が多いが、仕事をしている年齢の両親や兄弟姉妹からの問合せはメールが多くかった。

*以下の相談者・当事者の集計は、令和3年度に試行的にぶらっとホームで受けた「ひきこもり相談」の17件を含み集計を行った。

② 窓口につながった相談者の属性と年齢（令和3、4年度）※

担当が継続的に相談を受けている相談者の属性と年齢別件数をあらわしたもの



*来所した本人のうち生活支援課からつながった被保護者は20代5人、50代1人

POINT

当事者が相談につながっている例も多く、その年代は20代～50代と幅広い。区内在住の親兄弟が一番多く、その中でも50代の親の相談が多い。8050世帯の当事者も相談に来所しており、兄弟姉妹が相談に来て当事者につながったケースが多くみられる。

③ 相談のきっかけ（令和4年度）

「リンク」開設を知ったきっかけ



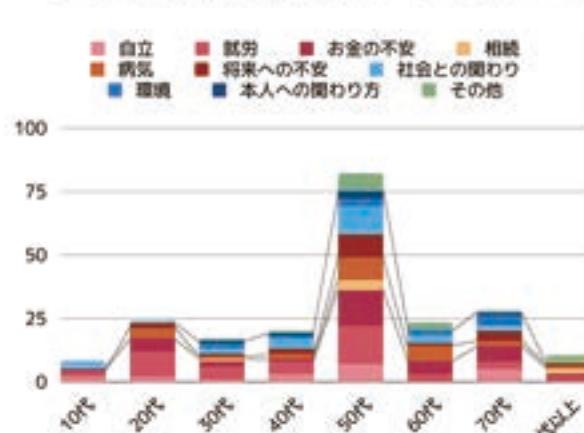
相談者年齢	区報・パンフ	インターネット	関係機関	実地	本人	ケアマネ	実験会	合計
10代	2	1	0	0	0	0	0	3
20代	13	2	0	0	0	0	0	15
30代	5	6	5	1	0	0	0	17
40代	10	10	3	1	1	1	0	29
50代	20	17	0	0	8	4	1	44
60代	6	13	2	2	0	0	0	23
70代	9	9	3	2	0	0	0	24
80代以上	3	4	1	1	0	0	0	10
合計	67	71	17	2	16	8	1	193

POINT

開所前に区報の一冊に掲載されたこともあり、区報やパンフレットをみての問合せも多かった。あんすこ（包括）およびケアマネは別カウントとしたが、それ以外の区内関係機関からのつなぎ件数が多くなっている。

④相談の主訴（令和3、4年度）

どのような相談を希望したか、その内容について（複数回答）



自立⇒経済的な面も含めた生活自立 / その他⇒家族の介護・道路・帰宅急患・消息を知りたい・資料支援・不動産売却・気持ちを吐き出したい・会いたいなど

POINT

主訴としては家族の相談は経済面、当事者は就職の不安が多い傾向がある。20代と50代の当事者は就職への不安があり、50代の当事者は就職も含めて金銭面での不安が顕著であった。子どもが若い50代親世代には子どもへの接し方を聞きたいという要望があった。

⑤アウトリーチ（令和3、4年度）

訪問、同行の件数とその内容

対象：本人20名／家族15名／計35名

(単位：回)

	本人	家族	合計	うち	訪問		
					ふらっと・メルク両機関対応	ふらっとスタッフのみ	メルクスタッフのみ
訪問	49	26	75	→	43	22	10
同行	29	7	36		2	33	1

内訳

訪問 新規面談
外出困難な方への継続面談
食糧支援
訪問診療立ち合い など

同行 出張所
保健センター
心身障害者福祉センター 弁護士相談 など
転宅支援
各区役所窓口

POINT

来所が難しい方について訪問で面談を行うことが多く、ふらっとホームとメルクマールそれぞれのスタッフが2人体制で行っている。同行は当事者の様々な手続き同行が多いため、ふらっとホームの職員のみが対応することが多かった。内容も障害年金や後見制度に絡んだ通院同行を含め、多岐にわたった。

⑥終結ケース（令和3、4年度）

令和3、4年度に受けたケースの終結に至った内訳と至るまでの期間

(単位：件)

相談者属性	生活保護申請	就労	店外転居	相談家族の問題解決
本人	9	0	1	0
親(区内)	2	0	0	0
親(区外)	0	0	1	0
兄弟姉妹(区内)	0	0	0	1
兄弟姉妹(区外)	0	0	0	0
その他親族	0	0	0	0
その他	0	0	0	0
合計	11	0	2	1

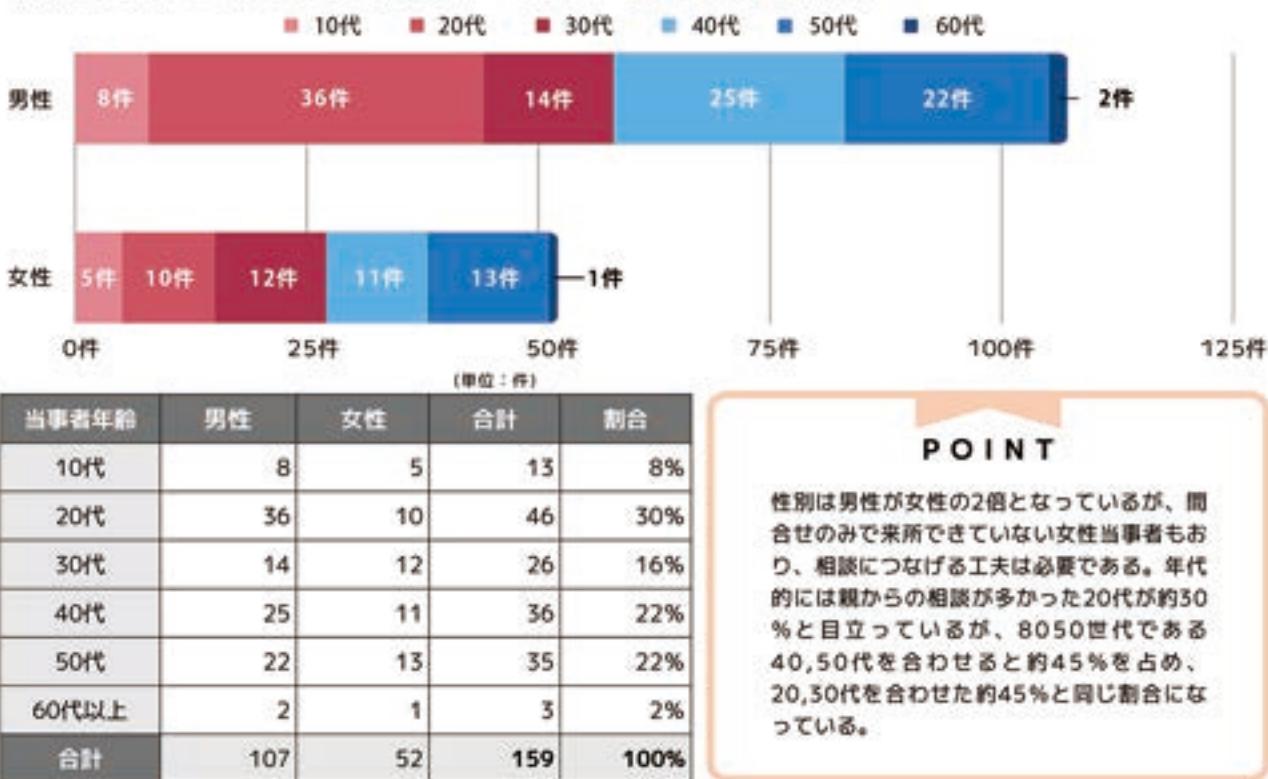
POINT

終結に至った理由は生活保護を申請し、生活基盤の安定を図ったケースが多かった。また、当事者が親の経済状況の悪化から仕送りを受けられなくなり、賃貸借契約更新のタイミングで実際に帰ったケースもあった。

2.当事者件数

①把握した当事者の属性と年齢（令和3、4年度）

相談員につながっていない当事者も含め、「リンク」で把握した当事者件数

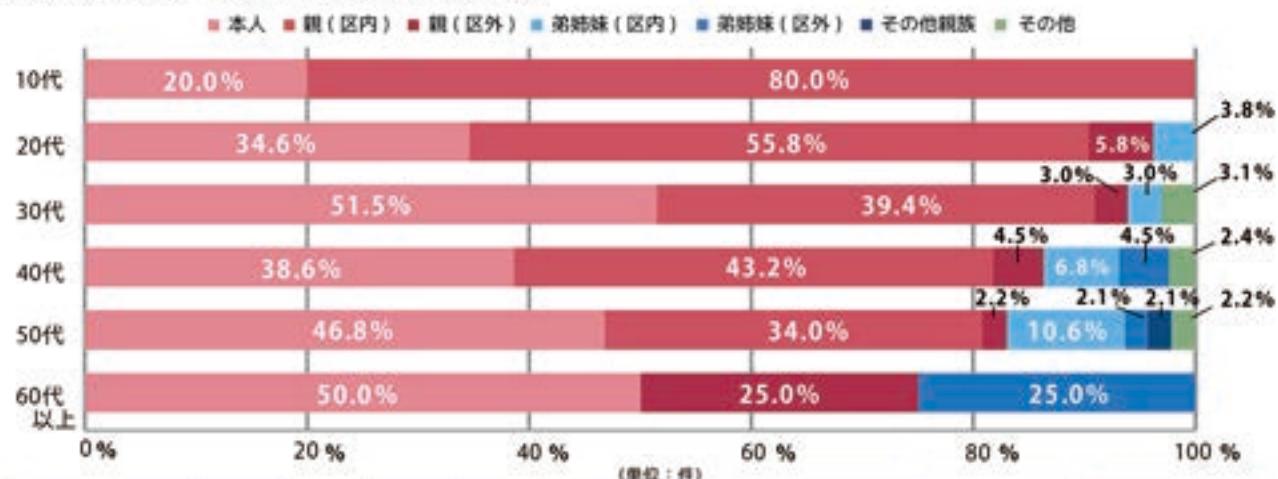


POINT

性別は男性が女性の2倍となっているが、問合せのみで来所できていない女性当事者もあり、相談につなげる工夫は必要である。年代的には親からの相談が多かった20代が約30%と目立っているが、8050世代である40,50代を合わせると約45%を占め、20,30代を合わせた約45%と同じ割合になっている。

②当事者年齢別 / 相談者属性（令和3、4年度）

来所者の属性を当事者の年齢別に整理した件数



POINT

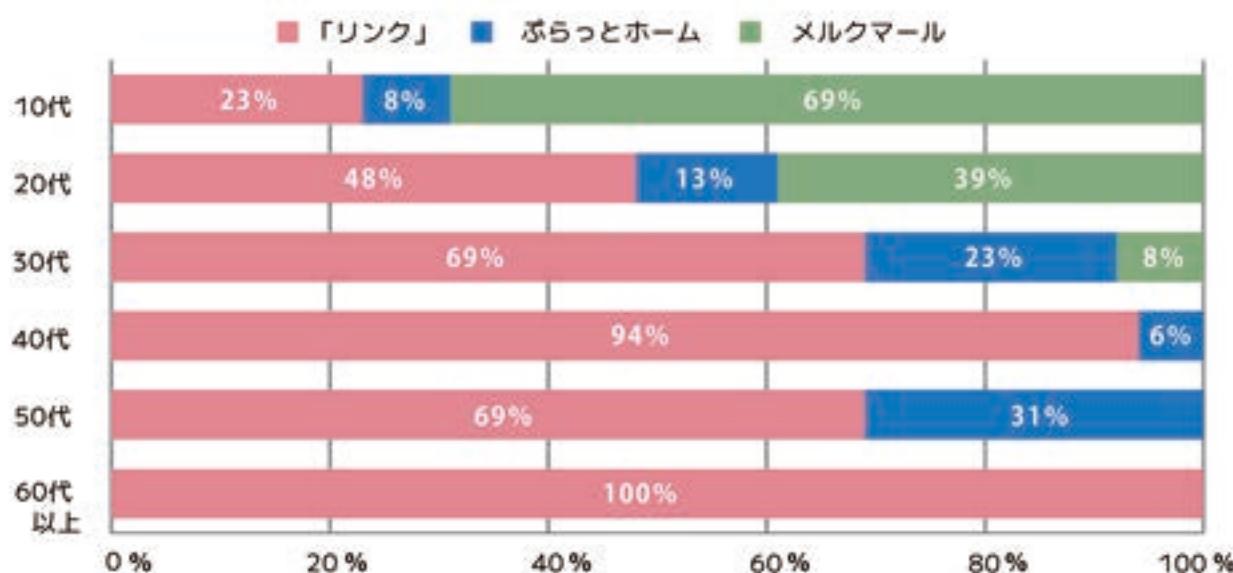
本人来所は全ての年代で見られるが、とくに20代～50代までが計74名と多く、各年代ごとに20人前後が来所している。当事者が10代20代の場合、同居する親が相談に訪れる割合が高いことがわかる。当事者が30代40代の場合、親なき後を見据えた家族相談の表れとして、40代以降は親に加えて兄弟の相談が増える傾向がみられる。

*親(区内)はひきこもっている家族3人の相談があったため、

親1人に対し3人の当事者件数カウント

③当事者年齢別 / 支援機関属性（令和3、4年度）

インテーク面談後、主に相談対応する機関（「リンク」、ぶらっとホーム、メルクマール）の内訳



当事者年齢	「リンク」	ぶらっとホーム	メルクマール
10代	3	1	9
20代	22	6	18
30代	18	6	2
40代	34	2	0
50代	24	11	0
60代以上	3	0	0
合計	104	26	29

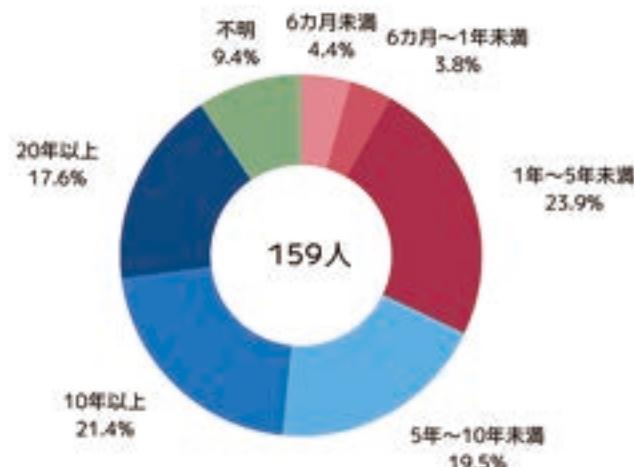
POINT

「リンク」で継続対応する件数が全当事者件数の65%を占め、当事者年齢に関わらず、2機関での支援が求められているケースが多いことがわかる。ぶらっとホームのみ、メルクマールのみで対応するケースはほぼ同割合であった。ぶらっとホームのみの対応では、40代50代が半数を占めるが、各年代に対応していることがわかる。当事者が若い世代にメルクマールのみが対応することが多く、その中でも20代の割合が高い。

④ひきこもりの状態（令和3、4年度）

「リンク」に相談のあったひきこもりの状態をいくつかの視点で分析する

ひきこもり期間（現在の状況になった期間）



POINT

5年未満が約3割、10年以上が約4割を占めている。20年以上の長期にわたるひきこもり状態も17.6%(28件)となっており、長期化した方の相談も多くあることがわかる。

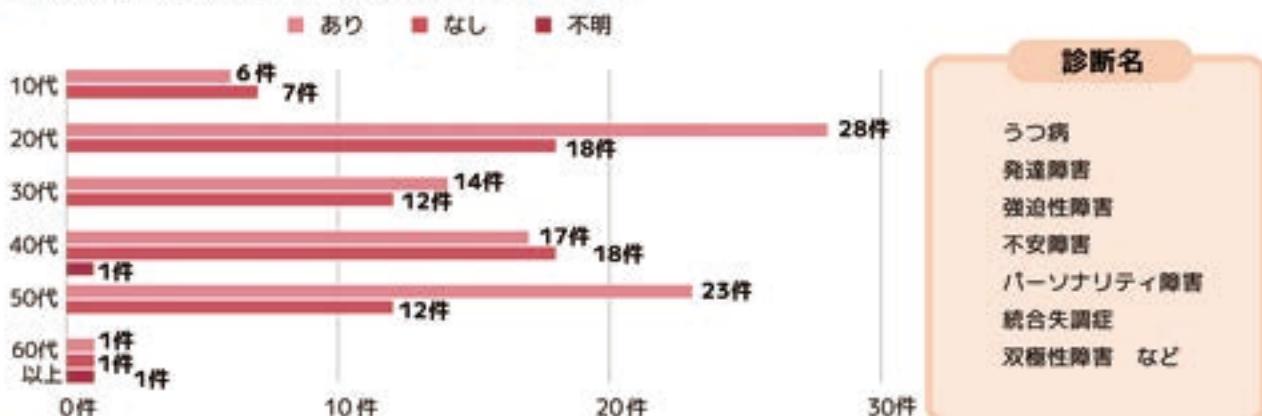
ひきこもり要因(複数回答)



POINT

学校をひきこもり要因としている年代は10代20代が多く、仕事は40代、50代が多い。はっきりといじめという理由を明らかにした件数は少ないが、来所者の聞き取りによるものは学校要因に含まれている可能性もある。

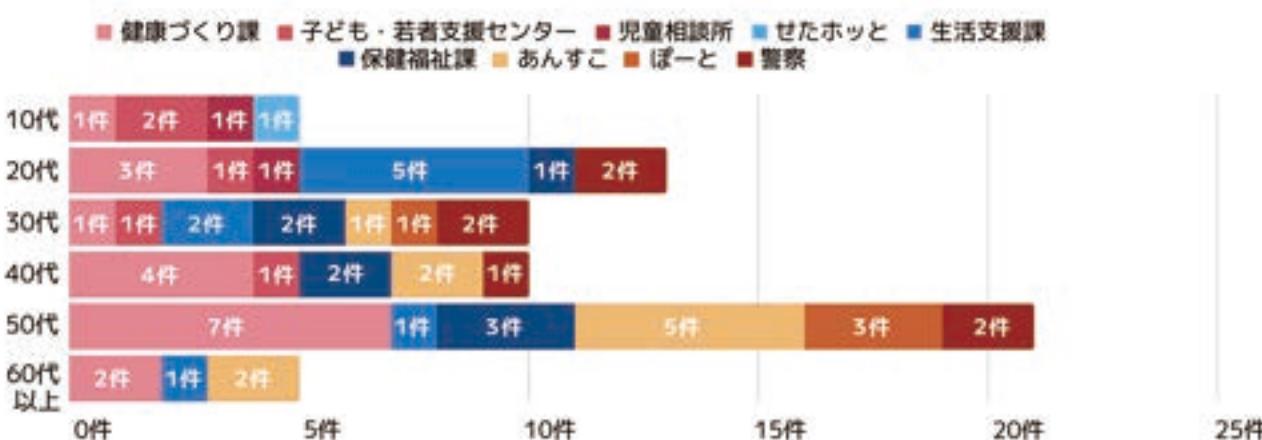
医療機関の有無(過去利用があったものも含む)



POINT

医療機関にかかっていたが現在は途切れているケースも含めカウント。56%ほどがありなっているが、家族のみの相談の場合、現状把握が十分にできていない場合も含めての回答となっている。

つながっている機関(過去つながりがあったケース、「リンク」支援後つながりができたケース含む)



POINT

「リンク」支援以前から区役所の関係部署が世帯に関わっているケースも一定数あった。その中でも、健康づくり課に家族が相談したことがあるケースが多く、当事者の健康状態に不安を感じ、対応の相談をした経過が浮かび上がる。また、7件は警察が関わっており、中には警察から「リンク」を案内されたケースもあった。

「リンク」支援後の制度対応でのサポート

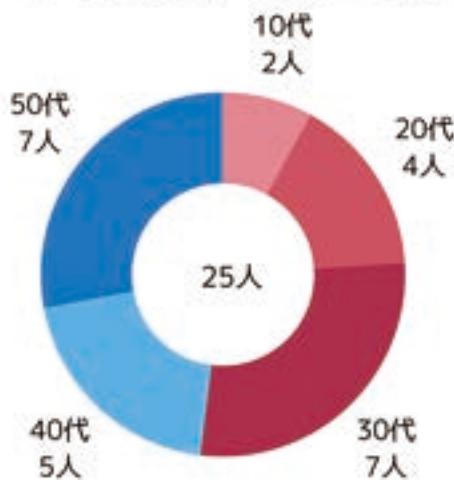
当事者年齢	生活保護手続き	障害認定	世帯分離	成年後見	障害年金
10代					
20代	3				
30代	1	1	1	1	1
40代	4		4		
50代	3	1	1		
60代以上		1		1	
合計	11	3	6	2	1

POINT

生活保護申請を含め、福祉制度を活用することで生活状況の改善につながるケースが多い。制度活用の情報提供をきっかけに当事者の来所につながったケースもある。親の高齢化とともに、世帯の経済状況の厳しさや住環境維持の問題などから、当事者と家族が親なき後の生活に不安を感じている場合も多い。

そのため、ひきこもりの状態への直接的なアプローチではなく、生活状況の改善という視点から当事者へのアプローチができることも、「リンク」支援の特色となっている。とくに30代以降において、さまざまな制度の活用や世帯分離ケースが目立つ。

⑤「リンク」支援後、家族から当事者につながったケース（令和3、4年度）



POINT

家族から当事者につながったケースは計25件で、全当事者数の約16%である。家族が継続的な面談につながることで、当事者への関わり方への助言や家族を通じた当事者宛のメッセージを届けてもらう試みが、当事者の来所・面談につながることがある。



3.相談者・当事者利用サービス

■居場所利用状況

ぶらっとホームとメルクマールが合同で開催した居場所「むすびば」(P26参照)。豪徳寺近くの地域の居場所カフェを借りて開催し、テーマを決め、グループでの会話を楽しんだ。参加人数の平均は3.5人で、30代～50代の男性の参加が多かった。

相談者年齢	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
10代												
20代												
30代		1			1	2		1		1		
40代		2	2	1		2	1	2	1	1		1
50代		1	1	1		3	1	2	2	2	3	2
60代以上												
合計		4	3	2	1	7	2	5	3	4	3	3



この他、メルクマールの居場所事業利用1件あり※

※メルクマールの居場所利用にあたっては、メルクマールで定める要件を満たす必要あり。

■ぶらっとホーム事業利用状況

ぶらっとホームの専門相談サービスを利用した方の件数

(単位：件)

相談者年齢	就労準備	就労訓練	転宅支援	作業療法士	保健師相談	社労士相談	FP相談		弁護士相談	日常生活支援アドバイザー
							組	本人		
10代										
20代	1			1	1	2			1	
30代		1			1	2	1			1
40代	2		3		1					
50代	3	1	1			2	1	1	1	
60代以上							7	1	1	
合計	6	2	4	1	3	6	9	3	2	1

POINT

相続や今後の経済面の相談には弁護士やファイナンシャルプランナーの相談が活用され、体調面や障害の疑いについての相談には保健師相談や作業療法士の簡易検査が利用された。

また、日常生活自立のための援助として、独自の取組みである「日常生活支援アドバイザー」の派遣により、掃除や洗濯、片付けのアドバイスを行ったケースもあった。

コラム

10代から60代まで幅広い対応を行う中、それぞれの年代にあわせた必要な支援を行うことが出来る強みが「リンク」にある。相談者のメンタル面を支え、当事者と生活上の具体的な工夫も一緒に考えていくほか、親面談で当事者への関わり方を相談していくメルクマールの面談、生活面での制度利用を行いながら、停滞しがちなひきこもり支援に動きを与えるぶらっとホームのアプローチが連携して同時にできることである。

当事者や家族だけではなく、関係機関からの相談も受けているため、単一的な対応だけではなく、幅広く様々なアプローチを同時に行うことが必要である。「リンク」内の連携だけではなく、多機関との連携協働も対応において大事にしている重要なポイントである。

第2節 開催会議・多機関連携

1.重層的支援協議会・部会

代表者会議

	日 時	内 容
第1回	令和4年8月3日 14時～15時30分 オンライン開催	<ul style="list-style-type: none"> ● 重層的支援協議会 協議会について、トピック報告、部会報告 ● 子ども・若者支援協議会 部会報告、トピック報告、意見交換
第2回	令和5年1月16日 14時～16時 オンライン開催	<ul style="list-style-type: none"> (1)世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」について (2)基調講演「コロナ禍を経た東京ティーンコホート研究の報告」山崎修道氏 (公益財団法人東京医学総合研究所社会健康医学研究センター)

構成員

<地方公共団体の機関>

- 総合支所保健福祉センター 生活支援課／保健福祉課／健康づくり課／子ども家庭支援課
- 生活文化政策部 人権・男女共同参画担当課
- 経済産業部 工業・ものづくり・雇用促進課
- 保健福祉政策部 生活福祉課
- 高齢福祉部 高齢福祉課／介護保険課／介護予防・地域支援課
- 障害福祉部 障害地域生活課／障害保健福祉課
- 子ども・若者部 子ども・若者支援課／児童課／子ども家庭課
- 世田谷児童相談所
- 世田谷保健所 健康推進課
- 教育総務部 学校健康推進課
- 教育政策部 教育指導課／教育相談・支援課
- 東京わかものハローワーク

<関係機関・学識経験者>

- | | |
|-------------------|----------------|
| ●ぶらっとホーム世田谷 | ●医療機関 |
| ●メルクマールせたがや | ●区内医師会 |
| ●せたがや若者サポートステーション | ●研究機関 |
| ●青少年交流センター | ●障害者就労支援センター |
| ●民生委員・児童委員協議会 | ●発達障害相談・療育センター |
| ●区立小学校・中学校校長会 | ●産業振興公社 |
| ●区内都立高校 | ●特定非営利活動法人 |
| ●区内大学 | |

社会福祉法第106条の6に基づき、行政、支援機関等が集まり重層的支援体制整備事業を円滑に実施するために必要な情報交換及び必要な支援を検討する重層的支援協議会が開催された。世田谷区では、子ども・若者育成支援推進法第19条1項に基づく子ども・若者支援協議会が既に設置されており、構成メンバー・目的が重なることから、代表者会議は両協議会を同時に開催している。官民合わせ、様々な分野からの参加があり、「リンク」の事業周知を効果的に行うことができた。令和4年度は、新型コロナ感染症の影響もあり、2回ともオンライン開催となった。

第1回は区内の8050問題について各機関が把握している課題について共有を行った。また、それを受けた第2回では約1年を通して「リンク」が行った支援事例を報告し、連携についての課題共有を行った。事例紹介により「リンク」支援の内容が各機関に理解され、令和5年度以降はより具体的な連携を図ることになった。

8050支援部会

	日 時	内 容
第1回	令和4年9月29日 9時30分～11時30分 キャロットタワー セミナールーム	区のひきこもり支援概要および「リンク」説明 部会の位置づけおよび役割について説明 各機関の事業内容および8050支援の課題について
第2回	令和5年2月17日 14時～16時 しゃれなあとオリオン	「全区版地域ケア会議」および「8050アンケート」報告 「リンク」実績および事例をもとにした連携検討 情報提供について

構成員

<地方公共団体の機関>

- 総合支所保健福祉センター 生活支援課／保健福祉課／健康づくり課
- 保健福祉政策部 保健福祉政策課／生活福祉課
- 高齢福祉部 高齢福祉課／介護保険課／介護予防・地域支援課
- 障害福祉部 障害保健福祉課

<関係機関・学識経験者>

- | | |
|---------------|----------------------------|
| ● ぶらっとホーム世田谷 | ● 成年後見センター |
| ● メルクマールせたがや | ● あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター） |
| ● 東京都立松沢病院 | ● 世田谷区基幹相談支援センター |
| ● 世田谷区社会福祉協議会 | ● 地域障害者相談支援センター「ぼーと」 |

<オブザーバー>

- 保健福祉政策部 保健福祉政策課指導・サービス向上

ひきこもり・就労支援部会は、「就労」をキーワードとした支援ネットワークの構築を主な目的としている。第2回以降は、対面による来場形式にて開催した。構成委員からは事例検討会を望む声が一定数あり、対面形式に切り替わったことにより、第2,3回は事例検討会を行った。発表者が対応の示唆を得るだけでなく、参加者が事例検討をとおして各機関の強みや対応を学ぶ機会となつた。

ひきこもり・就労支援部会

	日 時	内 容
第1回	令和4年6月30日 10時～11時30分 キャロットタワーセミナールーム オンライン併用開催	部会説明 自己紹介 事務連絡
第2回	令和4年9月22日 10時～12時 キャロットタワーセミナールーム	事例検討 情報交換 事務連絡
第3回	令和4年12月22日 10時～12時 キャロットタワーセミナールーム	事例検討 情報交換 事務連絡
第4回	令和5年3月23日 10時～11時45分 キャロットタワーセミナールーム	令和4年度の総括 事務連絡

構成員

<地方公共団体の機関>

- 総合支所保健福祉センター 健康づくり課
- 経済産業部 工業・ものづくり・雇用促進課
- 保健福祉政策部 生活福祉課
- 障害福祉部 障害保健福祉課／障害地域生活課
- 子ども・若者部 子ども・若者支援課
- ハローワーク

<関係機関・学識経験者>

- ぶらっとホーム世田谷
- メルクマールせたがや
- せたがや若者サポートステーション
- 青少年交流センター 野毛／希望丘／池之上
- 障害者就労支援センター 「すきっぷ」就労相談室／「しごとねっと」
- 発達障害者就労支援センター 「ゆに（UNI）」
- 特定非営利活動法人東京都自閉症協会「みつけばハウス」
- 特定非営利活動法人まひろ「アイキャリア」
- 三軒茶屋就労支援センター「三茶おしごとカフェ」
- 世田谷区男女共同参画センター「らぶらす」

<オブザーバー>

- 世田谷保健所 健康推進課

2.重層的支援会議（「リンク」検討会）

【「リンク」検討会】（重層的支援会議に含む）

「リンク」では毎週木曜日にすべての「リンク」メンバー（ぶらっとホームおよびメルクマール）と区の生活福祉課担当者が前週の新規受入をすべて検討し、今後の支援方針を立てている。また、アウトリーチや多機関との協働、緊急性のある案件を隨時共有し、2機関での動きの確認を行っている。

【重層的支援会議】

支援プランの作成や終結に関しては重層的支援会議にて決定や確認を行っている。

また、隨時過去案件についてのモニタリングも行っている。

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
重層的支援会議		5	4	6	4	4	5	4	4	4	4	4	6	54
うち	プラン作成件数	0	1	2	1	1	0	0	3	1	3	1	0	13
	新規作成件数	0	1	2	1	1	0	0	3	1	3	1	0	13
	再プラン件数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	終結件数	0	0	1	1	0	1	0	2	1	0	1	2	* 9

*令和4年度のみの終結件数

3.個別ケース検討会議(支援会議)

「リンク」では複合的な課題をもつケースに対し、社会福祉法第106条に定められている個別ケース検討会議(支援会議)を行っている。個別ケース検討会議では情報の共有だけではなく、今後起こりうることに対しても話し合いを行い、各機関の強みをどう活かして世帯をサポートしていくか、世帯ごとの連携体制づくりを大事にしている。そのため、現在関わっている機関だけではなく、今後関わりを持ってもらう可能性のある機関にも参加を呼びかけている。

また、「つなぐ」だけではなく、「重なり合う連携の形」を大事にしており、それぞれの機関の役割を持ちつつも、その家族の課題解決のためにより良い形を考えていく会議にすることに重点を置いている。そのため、役割にとらわれることのない、自由な発想や意見を述べてもらう会議となっている。

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
支援会議		0	0	0	2	0	1	2	1	1	1	1	2	10

4. 医療連携（事例検討会）

「リンク」では令和4年10月より区内医療機関の医師と連携して事例検討を行っている。令和4年10月から令和5年3月の間、20件のケース検討を行った。

内容

新規ケースに対しての医師からの医療的な視点での見解とアドバイス、前回検討したケースの対応報告を行っている。

振り返りと今後の展開

医療機関にかかっていないひきこもり状態の方、医療機間にかかることに対して不安が強い方、家族が医療機間にに対して拒否的な方など、様々な要因で医療機間につながっていなかったり受診が途切れている方の事例を主に検討している。

その中で医療機間で何ができるか、つながる意味や対応方法などについてアドバイスを受け、支援に役立てている。

今後は面談につながった方が医療へのファーストステップとして、いつも利用している面談室で、医療機間との関わりについて医師に相談が出来る場としての活用も検討している。

5. 連携機関一覧

*継続的に連携し支援を行った関係機関

区役所

- 生活福祉課
- 保健福祉課
- 子ども家庭支援課
- 児童相談所
- 生活支援課
- 健康づくり課
- 子ども・若者支援課

関連機関

- あんしんすこやかセンター
- 成年後見センター
- しごとねっと
- ハローワーク
- 教育機関(学校)
- 介護事業所
- 地域障害者相談支援センターぼーと
- ゆに
- 若者サポートステーション

地域

- 地域社協事務所
- 子育て支援団体
- 医療機関
- 民生委員・児童委員
- 子ども食堂
- 不動産会社

第3節 その他の取組み

1. 居場所

むすびば

第1節 3. 相談者・当事者利用サービスで参加者数を紹介した「むすびば」はぶらっとホームとメルクマールが合同で開催している居場所。毎月1回、豪徳寺駅近くの地域のカフェを借りて開催。

【内容】

ぶらっとホーム、メルクマールそれぞれ1名の支援員が入り、参加者と一緒に円になってサイコロトークを行う。
カフェで好きな飲み物を1杯頬み、飲みながらリラックスして開催した。

サイコロトークのテーマは軽い気持ちで話せるものと好きな話題で話せるものをそろえた。

- 全体の流れ
- ① 集合してアイスブレイクでお互いの緊張をほぐす。
 - ② 休憩をはさみながらサイコロをふってその番号のテーマに沿って話をする。
 - ③ 最後に感想をシェアする。

【参加者の感想】

- ・いろいろ人と関わりをもったり行った時に誰かがいるのはいい。
- ・車座で話をするのはみんな平等で良かったと思った。
- ・自分自身が言葉のキャッチボールがもっと出来たらと思った。
- ・やはり他人と話すのはとても疲れた。ただ、2時間はあっという間だった。
- ・家のことがあって大変だったが気分転換できた。懐かしい話ができた。
- ・フリートークよりもテーマがあったほうが話しやすかった。

【今後の展開】

軽い話をしたい、少し深い話もしたい、という参加者によってニーズの差異はあるが、そこをどう調整していくか、参加者がストレスを感じないようにスタッフで考えていきたい。また、令和4年度は場所を地域の居場所となっているカフェを借りたが、令和5年度は面談場所で慣れているSTKハイツで開催することを検討している。

みつけばハウス 出張ワークショップ

発達凸凹の特性がある当事者ピアソーターが様々なプログラムを展開している「みつけばハウス」による出張ワークショップが開催された。



毎月第4木曜日 13:45~15:15 参加費無料

※13:30より入室は可能です。

みつけばハウス 出張ワークショップ		
会場: ハウスアリス	会場: 朝日幼稚園	会場: 朝日幼稚園
日程: 12月1日(金)	日程: 1月11日(水)	日程: 2月8日(水)
会場: メルクマール・活動ルーム	会場: サボスチ・セミナールーム	会場: サボスチ・セミナールーム
内容: ワークショップ	内容: ワークショップ	内容: ワークショップ
主催: ピアソーター	主催: ピアソーター	主催: ピアソーター
料金: 無料	料金: 無料	料金: 無料
お問い合わせ		
電話: 03-5931-1111		

2. 就労準備支援事業の活動紹介

ぶらっとホームでは生活困窮者自立支援制度に基づく「就労準備支援事業」を行っており、「リンク」も参加している。

その中でも「リンク」が積極的に参加をした2つの外出活動を紹介する。

有償ボランティアや地域のみかん狩りボランティアにたくさんの关心が寄せられ、仕事経験がある人もない人も、積極的に参加していた。

天祖神社清掃有償ボランティア

管理人が不在となった区内の天祖神社で地域からの依頼を受け、落ち葉掃きのボランティアを行っている。

【内容】

朝の9時に集合して終了は11時。毎週金曜日開催だが、10月～12月は落ち葉も多いため、第2、4火曜日に追加で「リンク」の当事者だけが参加して作業を行った。謝礼金あり。



【参加状況】

6月からの取組みだったが、「リンク」登録者からは令和4年度9人から合計62回の参加があった。リピート率も高く、神社に来ると心が洗われる、と話す人もいた。1人黙々と作業が出来ることもポイントだが、落ち葉をまとめるときには自然にゴミ袋を広げるなどの協力体制もあり、適度な人の間わりが良かったようだ。

みかん収穫ボランティア

【内容】

以前ぶらっとホームの就労準備で間わりのあった河原農園の一部が区民農業広場となり、現在4つの団体が管理。区民にみかん狩りイベントを開催している。

そのイベント後の取り残したみかんをボランティアとして収穫する作業を行った。

【参加状況】

参加者が収穫したみかんは社協内で行っているフードバンチーラー地域の子どもも向けフードバンチーラー、保育園や福祉作業所などに届けた。また、参加者には謝礼としてみかんを持ち帰ってもらった。「リンク」登録の親子で参加されるなど、家族のふれあいの場ともなった。

みかん収穫ボランティア

みかん農園でみかんの収穫をお手伝いいただける方を募集いたします。

場所：東京都世田谷区桜丘4丁目19-50

日時：令和4年12月15日（木曜）

12月22日（木曜）

現地集合：13:00～16:00予定

*雨天中止

ご用意ください：汚れてもよい服装でご参加ください

軍手、みかん持ち帰り袋

報酬：収穫みかん



第三章 事業評価

第1節 事例報告

- 1.当事者につながった事例
- 2.多機関が会議を経て連携した事例
- 3.世帯分離した事例
- 4.親亡き後一人取り残された事例
- 5.一步を踏み出した事例

第2節 「リンク」連携機関および利用者の声

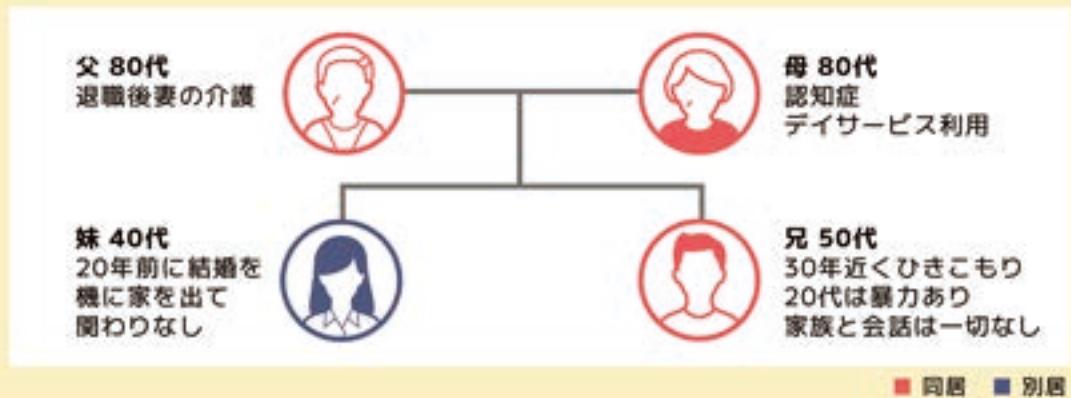
- 1.連携関係機関からの意見
- 2.利用者の声

※事例は個人情報保護の観点から複数の事例を加工しています。

第1節 事例報告

1.当事者につながった事例

実家を離れ間わりをもたなかつた妹が、母の認知症を機にケアマネとつながり、将来の不安からひきこもりの兄について「リンク」への相談が開始。相談が進む中で、兄本人から相談へとつながつた。



支援状況

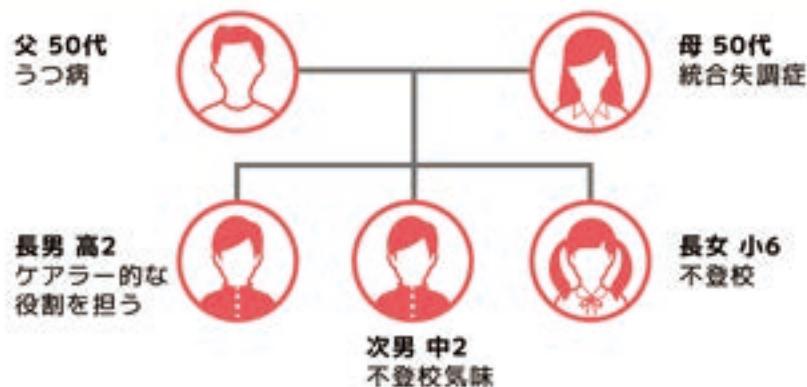
関係機関	ケアマネ、あんすこ、医療機関、デイサービス、地域社協事務所、地域家族会、ファイナンシャルプランナー、保健福祉課、課税課
支援までの経過	兄は仕事が長続きせず、職を転々とする。仕事のことで両親と言い争い、暴力をふるったあと部屋にひきこもるようになった。昔の暴力の記憶から、両親、妹とともに兄には関わらないように30年間生活をしていたが、両親の高齢化により介護事業者の間わりが始まった。
支援開始後の展開	「リンク」で半年ほど父と妹と面談を重ねる。昔の兄妹の関係性が悪くなかったことから、まずは妹から兄に「介護のことで相談をしたい」という旨のメモをメールアドレスを書き添えて渡したところ兄からメールがきた。 30年の苦悩を綴ったもので、高齢化した両親、年齢を重ねた自分に対してどうして良いかわからなかったとの記載があった。 兄妹がやりとりをしばらくしてから、妹が兄を「リンク」につなぎ、兄と「リンク」がメールのやりとり開始し、その後来所に至った。兄はゆっくりと外出に慣れることから始め、母親の介護状況や父親の健康状態を「リンク」が介護関係者と共有しながら、家族の状況変化に対応している。兄の非課税手続きを手伝い、介護費用も抑えられた。今後の介護費用の不安や父の孤立化を解消するため父を地域につなぎ、近所に相談できる人を増やしていく。

コメント

ひきこもり問題は家族全体が孤立した状態が何十年も続くと、家族も本人も疲弊をし、諦めの気持ちにもなっていく。家族全員の気持ちを大事にしながら、歳月の経過で起こる絡み合った課題の全容把握をしながら進めていく必要がある。

2.多機関が会議を経て連携した事例

父が仕事に行かずひきこもり状態となっていると近くに住む叔母が「リンク」に父を連れて来所。子どもたちは食事もままならない状況であることが判明。



■ 同様

支援状況

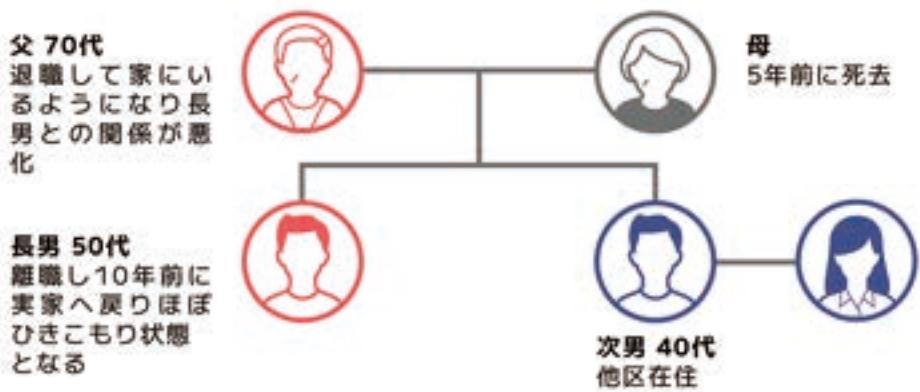
関係機関	健康づくり課、生活支援課、子ども家庭支援センター、児童相談所、小中学校、高校、地域社協事務所、民生委員、子ども食堂、医療機関、不動産会社
支援までの経過	母が体調不良であるため、父は家事や子どもの世話などを全て行う中、仕事もうまくいかずうつ病を発症しひきこもり状態になった。父に代わり長男が家のことや弟妹の面倒をみているが、金銭的に厳しい状況が続き、食事も十分ではなかった。
支援開始後の展開	「リンク」が父と連絡を取り合い、来所した時に家計状況を確認。仕事には行ったり行かなかったりの状態。児童相談所も関わっていることが判明し、個別ケース検討会議を開催。今後の生活保護受給も視野に入れ生活支援課や、地域資源の利用を考え社協地区担当にも出席依頼。現在関わる機関とあわせて8機関で会議を行い、今後の支援の検討を行った。その結果、家計状況と生活保護の要件を見ながら生活支援課へ案内することや、学校関係者と自宅訪問時の子の様子を共有すること、地域の子ども食堂や学習支援につなぎ、子どもたちの様子を確認することなどが決められ実行することになった。会議後の働きかけで、子どもたちが地域の子ども食堂に食料を取りに行ったり地域の人と話をしたりして家庭内の状況を把握できるようになった。その後、生活保護につながり転宅支援も受けている。また、両親の体調を見ながら次男長女の進級を見守り、長男の希望する進路によっては生活福祉資金の教育資金の貸付、受験生チャレンジ貸付も視野に入るため、引き続き学校等と連携をとっている。

コメント

家族全員に支援が必要な状況。個別ケース検討会議が有効に働いた事例である。それぞれの機関が対象となる家族にアプローチをし、地域の協力を得ながら対応する流れへつながった。

3.世帯分離した事例

母が健在だった時には落ち着いた生活ができていたが、母の死後はひきこもり状態の長男と父の関係が悪化。心配した次男が相談に来所した。



支援状況

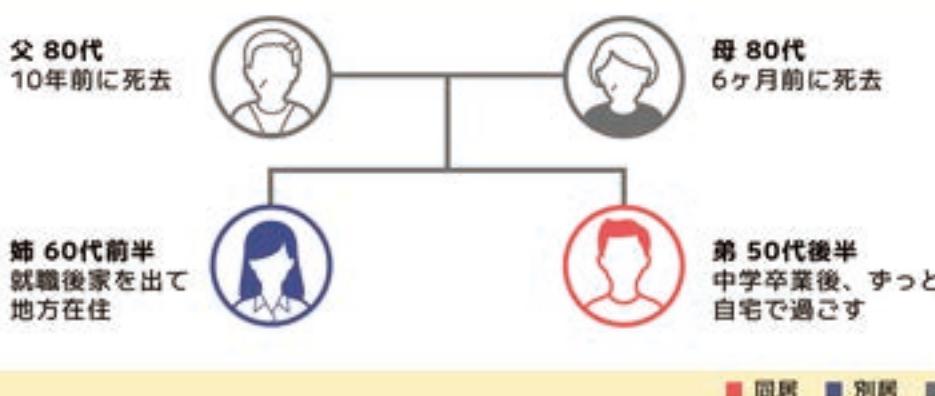
関係機関	健康づくり課、医療機関、生活支援課、社会保険労務士、不動産会社
支援までの経過	長男は10年前の離職時から体調不良で再就職ができない状況が続いていたが通院歴はなし。母が存命中は父との関わりは薄かったが、母が死去し父の退職で在宅時間が長くなり接点が増えたことから長男と父の関係が悪化。口論しては警察を呼ぶ事態が続いていた。
支援開始後の展開	次男来所の聞き取りで、警察関与後、健康づくり課保健師が訪問を行なっていることが判明。また、父も年金生活で息子を養うことが難しい状況で、父一人ならなんとか生活ができる経済状況であることがわかった。健康づくり課保健師と連絡を取り合い、数ヶ月かけて保健師同行で長男に「リンク」へ来所してもらうことができた。面談で長男の思いを聞いたところ、家で窮屈な生活をしていること、父の経済状態はわかっており一人暮らししたいが、自身も貯金がなく、通院費の工面ができず、体調も戻らないことなどがわかった。次男の金銭的な協力（通院費と転宅費用）によりまずは「リンク」同行で通院を開始し、一人暮らしのために転居先を探した。その後体調を整えながら一人暮らしを開始。生活費が不足する状況になったため生活保護を申請。現在は通院継続しながら障害年金の申請を進め、少しずつ働くことも視野に入れ始めている。物理的な距離ができたことで父との関係も改善しつつある。

コメント

家族が適度な距離感をもつことで関係性が安定することもある。また適切な支援が入ることで本人の自立が進むケースもある。家族間での膠着した状態にどうアプローチしていくのかケースバイケースの対応が必要。

4. 親亡き後一人取り残された事例

両親存命中は自宅で問題なく過ごしていたが、両親の死後一人残された状態を心配したあんすこの職員から「リンク」につながった。



支援状況

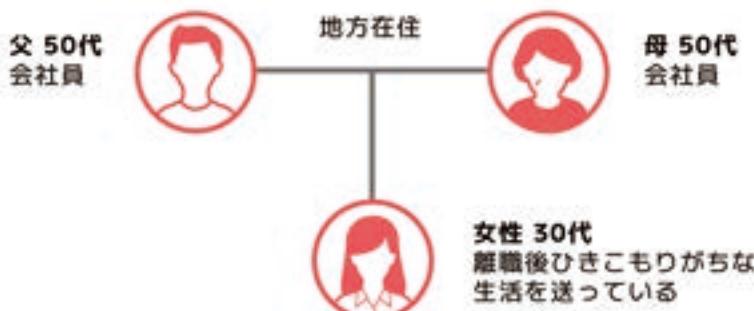
関係機関	あんすこ、母の成年後見人、成年後見センター、日常生活支援アドバイザー（ぶらっとホームのサービス）、健康づくり課、保健福祉課、医療機関
支援までの経過	父母への介護サービスが入っている中で、息子の存在を支援者側も把握していたがほぼ関わりはなかった。介護については姉を中心に相談が進んでいた。母死去後、心配したあんすこの職員が訪問したところ、生活がままならない状態であったことが判明。「リンク」につながる。
支援開始後の展開	まずは日常生活を整えるため、ぶらっとホームの日常生活支援アドバイザーが訪問し、食事の準備や掃除洗濯など最低限の生活についてアドバイスと見守りを行った。その過程で本人に障害の可能性も考えられたため、通院につなげ、医師の判断で障害手帳取得に向けて動き始めた。また日常の金銭管理にも不安があったため、姉の申し立てで後見制度の利用を検討し、後見センターとのやりとりを開始。後見人がつくまでの間、父母の後見人が見守りを行ってくれることになった。他者との関わりは拒否的ではなかったため、「リンク」が様々な手続きの支援や通院に同行することで信頼関係も構築でき、今後の生活についても徐々に自身の希望を話すようになってきた。

コメント

家族関係が良いほど、どこの相談窓口にもつながっていないというケースがある。兄弟姉妹が心配をしても両親が健在のうちは親が拒否する場合もあり、スムーズに支援につながりにくい現状がある。この事例のように、ひきこもりの一因に障害がある場合、母の死去後の対応としてはひきこもり当事者の生命の安全を第一に考えることが大切である。

5. 一步を踏み出した事例

大学入学で地方から上京し、区内で一人暮らし。その後就職したがパワハラで体調を崩し退社。現在は両親からの仕送りで生活をしている。



■ 同居

支援状況

関係機関	就労準備支援事業担当者・就労支援担当者（ぶらっとホーム）
支援までの経過	自ら来所し、今後どうしたら良いか不安で相談をしたいと希望。通院はしており、現在は精神的には安定傾向にある。医師からも就職活動をしても良いと言われているが、ブランクがあるため自信がなく、一人になると不安な気持ちになって動けなくなる。 両親はまだ働いており、しばらくは仕送りができると現在の状況も肯定的に受け止めてくれているが、両親への申し訳なさを感じている。
支援開始後の展開	まずは面談をしながら不安な気持ちを和らげつつ、今後始められそうなことや出来そうなことを考えていった。その中で、就労準備支援事業の神社の清掃ボランティアを希望されて開始。朝早いボランティアだが熱心に通い、少しずつ他の人の会話をできるようになっていった。少し自信がつき始めたことから、ステップアップを3ヶ月の介護施設での体験就労を行い終了した。 今後は就労支援員と面談をし、就労や資格取得などどのような道を進むのか、キャリアカウンセリングを受けていく。また並行してリンクの面談も継続し、就職活動での不安定になりがちな気持ちを支えていく。

コメント

大学入学や卒業で上京してきた後にひきこもってしまい、地方の両親が仕送りを続けるケースが多い。両親が高齢であれば両親の生活を守るためにも地方の支援員との連携が必要になる一方、両親が現役であれば、仕送りが続いている間に早急にひきこもり当事者への有効な支援について一緒に考えていく必要がある。本人の不安な気持ちを受け止めつつ、プログラムも自身で選択することが重要である。

第2節 「リンク」連携機関および利用者の声

1.連携関係機関からの意見

「リンク」と協働してみて

- ぶらっともメルクもどちらのスタッフも知っていたので関わりやすかった。今後、8050や7040の事例は増えていくので連携は必須と思っています。
(あんすこ)
- 支援者同士が顔の見える関係であることで、安心感が持て、チームとして動くことができる。(ぼーと)
- 情報共有ができ、いろいろな視点で考えられた。(児童相談所)
- 世帯全体を様々な角度から見て、タイミングやきっかけを探し(支援機関が)動きだすことができる。(生活支援課)
- 関係機関と情報共有することで当事者の方の今後の見通しが見えたと思います。(生活支援課)
- 「リンク」だけではなく関わりのある機関と相談できることは保健福祉課としてはメリットだと思う。(保健福祉課)
- 今まで関わりがなかったひきこもりのケースで、健康づくり課が関わる必要のあるケースの把握ができるようになった。(健康づくり課)
- 「リンク」とメルクマールの役割や立ち位置の違いがわかりにくい場合がある。(健康づくり課)

個別ケース検討会議に参加してみて

- 会議に出席することで、支援の最初の部分から関わり、関係者と共に認識をもてるところが良いと思った。(ぼーと)
- 自分の分野での主催の会議が多かったので、今まで関わっていない機関とも連携出来た。(児童相談所)
- 様々な関係機関がそれぞれの立場で具体的な支援の方向性を伝えられ、また、支援者が同じ方向で支援することを確認できる貴重な場であると思いました。(生活支援課)
- 多岐にわたる関係者が一堂に会し、必要な情報を一度に確認できたのは大きな収穫だった。ただし会議後に「リンク」が収集した情報が逐次提供されなかつたことは残念であり、積極的に情報交換を行う必要があると感じた。(生活支援課)
- 航とりが誰なのかがはっきりしていない感じを受けた。アプローチを誰がどうしていくのか決められたことは前進していると思う。(保健福祉課)
- 多くの参加機関が参加することで、重層的にケースを把握・検討することができた。具体的なケース検討をする会議としては、参加人数が多くなると感じることがある。(健康づくり課)

「リンク」開設前後の支援の変化

- ひきこもりは「リンク」につなげれば良いと明確になった。迷いなくひきこもりは「リンク」につなげられるようになった。(ぼーと)
- 今までの関連機関では対応しきれないケースがあったので、「リンク」が開設されたことによって、相談窓口が広がった。(児童相談所)
- 個別ケース検討会議をとおし、世帯の課題がいったん整理され、必要な取組みが見える状態で生保につなげていただくので、とてもやりやすい。(生活支援課)
- 効的な変化は見られないものの、支援の選択肢が増えたことはCWにも浸透してきた。(生活支援課)
- 現場でひきこもりの相談を受けたときに専門機関として紹介できることがメリットだと思う。(保健福祉課)
- ひきこもりの原因はさまざまで奥が深い。「リンク」で話を聞いてもらう中で解決の糸口が見つかると良い。(保健福祉課)
- 一元的なひきこもり相談窓口ができたことで、区民・関係機関からの相談窓口がわかりやすくなった。(健康づくり課)

今後の連携について

- アウトリーチとなると「ぼーと」がすぐに対応してくれているので、そちらに頼むことが多い。会議で話し合ったことをもとに、役割分担してもう少し早く動いてもらえるとよかったです。(あんすこ)
- 会議で決まった方針は、普段関わる少い機関との連携になるので、そのコーディネートが難しいと感じた。(児童相談所)
- ぼーとと「リンク」、どちらに連絡をするか、迷うことがある。(あんすこ)
- 会議で各機関が確認すると決定した内容について、「リンク」は期限を定めて集約し、それを遅滞なく関係機関と共有するよう体制を整えてほしい。(生活支援課)
- 引き続き、ひきこもり支援の専門性を活かしたネットワーク機関となってほしいと思う。(保健福祉課)
- 「リンク」と健康づくり課の役割、期待することなどの共通認識がまだ十分ではない。今後、事例を積み重ねることでスムーズな連携ができるようにしていただきたい。(健康づくり課)



2. 利用者の声

息子の社会的なひきこもりで大変悩んでいた時に、話を熱心に聞いてくださり、私の精神的な支えとなっていました。困ったらいつでも頼れという安心感に救われました。

最初は当事者（娘）の問題をどのように対応したらよいかという視点で、一方的に考えていたが、職員の方とお話しし、何回か継続してお話し合いをさせていただくうちに、自分自身の見方が一方的であったこと、相手を受け入れていなかっことに気づかされた。

一步踏み出すきっかけとなった相談の時間の中でひとつずつゆっくりとお話を聞いて下さったこと、問題解決に向けて一緒に考えて下さったこと、あせらずに少しづつ進めるよう支援して下さったこと、などがとても役立ちました。

どうするかわからなかった障害年金を申請していただけたことができました。
面接のときよく話を聞いていただけます。

話を聞いていただけたと言うだけでも非常に気持ちが楽になります。普通の知人友人といった関係の人には話せません。

また、一人ではどうしても前に進む勇気が持てず、行動するきっかけを与えてもらえてとても感謝しております。

社会への復帰ができるのか不安です。忙しいのはわかるのですが、担当の職員さんに電話しても他の電話にてたり、休暇中だったりして、お返事がもううのに時間がかかると不安になります。

支援の進展の速度が遅い事、利用者のやる事が少ない事でしょうか。
利用者さんの状態によっては簡単なボランティアを次々と紹介してやらせた方が、社会とつながっているという意識の強化、やりたい事を見つける、自分の自信になる、といった点で有効かと考えます。特に有償のボランティアは、自身が自由に使えるお金を得る事で、より多額の収入を得たいという意欲につながりました。



第四章 広報・啓発

第1節 研修会開催と「リンク」紹介

1. 8050問題研修会
2. 「リンク」説明
 - ①区内他機関への説明
 - ②視察対応
 - ③講演会参加

第2節 家族会・当事者会との連携

1. 家族会
2. 当事者会
3. 「かたら～な」

第3節 「リンク」キャラクター

第四章 広報・啓発

第1節 研修会開催と「リンク」紹介

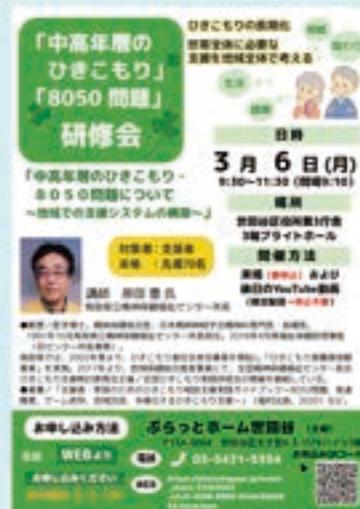
1.8050問題研修会

鳥取県立精神保健福祉センター所長 原田豊氏(精神科医)に講演を依頼し、「8050問題」についての講演会を開催。

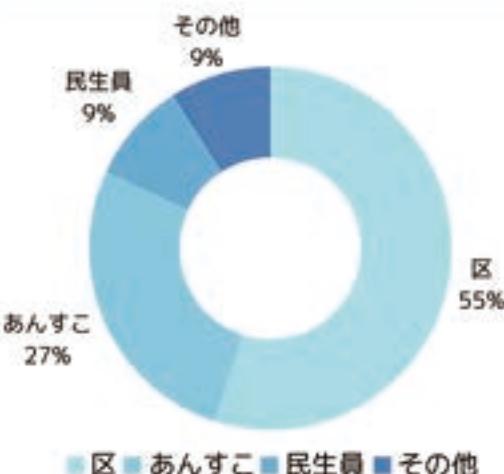
主に中高年層のひきこもりについて語ってもらった。

講演後は出席者から具体的な質問が活発になされ、大変好評だった。

1年間はアーカイブ配信を関係機関のみを対象に行うことになり、出席者が「ぜひ見たほうがいい」と所属部署内で勧めってくれている。



参加者アンケート結果



大変参考になつた	ある程度参考になつた	あまり参考にならなかつた	未回答
8 80%	0 0%	0 0%	20%

- 具体的でわかりやすい内容でした。ありがとうございました。
- ひきこもりの原因、経過、見きわめのポイントなど、とても分かりやすく理解が深まりました。
- 対人恐怖、集団恐怖が大きな要素ということ、今後の支援業務で肝に銘じたいと思います。
- 実践に基づく分かりやすい内容でした。自分の実践と重ねあわせて、確認することができました。
- ポイントが分かりやすく、とても聞きやすかったです。本人を中心とした支援で助込まれるような内容でした。
- 精神疾患、発達障害、それぞれの要因によって対応が違うことは大変参考になりました。

2. 「リンク」説明

①区内他機関への説明 46件

ふらっとホームとメルクマールの異なる2機関が対応をするため、当初はそれぞれの機関の説明と「リンク」の特徴的な取組みを紹介していた。しかし組織の特徴を理解するためには工夫が必要ということで、回を重ねるごとに事例を交え2機関の協働を示すなど工夫を凝らした。また、業務で時間内に参加ができない支援者たちへ向けて、オンラインでの説明会を開催し、アーカイブ配信も行った。

説明事業所

- 各地域ケア会議
- 相談事業所連絡会
- ぽーと連絡会
- エフエム世田谷
- など

②視察対応 10件

初年度の取組みであるが、各方面からの視察の申し出があった。

【他自治体視察対応】

大田区、墨田区、町田市、中野区、熊本県、静岡県

【その他】

大学職員ヒアリング調査、東京都ひきこもりサポートネットヒアリング

③講演会参加 3件

以下の講演会に参加し、「リンク」の取組みについて紹介を行った。

6月5日

オンラインシンポジウム

「これからひきこもり支援を考える」として、「リンク」に関わる各機関の説明を行った後、世田谷区長と筑波大学教授 斎藤環氏(精神科医)による対談を区民向けに行った。



2月18日

世田谷はなみずきの会による講演会

一般社団法人ひきこもりUX会議代表理事林恭子氏
「ひきこもりを理解し、希望あるこれからを考える
～当事者からのメッセージ～」として当事者として
のお話や今後について講演いただいた。

講演後の時間でひきこもり相談窓口「リンク」の取組みについても来場者に説明。



3月5日

アウトリーチネットシンポジウム参加

「8050世帯に出会う支援者の声」

一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会の研修、鳥取県立精神保健福祉センター所長 原田豊氏(精神科医)の講演の後、シンポジウムに登壇。

船橋あんしんすこやかセンターとともに世田谷区の取り組みを紹介。



第2節.家族会・当事者会との連携

1.家族会

2. 当事者会

POINT

ひきこもり相談窓口をどのようなものにするのかのご意見、そして「リンク」の愛称、キャラクター募集など、大事なことを決定する時にはいつも家族会、当事者会の皆さんに支えられている。

3. 「かたら～な」

当事者会、家族会、そしてCOMOLY(※)の協力により、ひきこもり当事者や経験者、家族や支援者が集まってテーマに沿って語る会を令和3年度に引き続き開催。ハイブリッドで行い、リアル参加もオンライン参加も大盛況であった。

(※)ひきこもりと社会を繋ぐことを目的としたオンラインプラットフォーム



日時：令和5年3月18日（土）

参加者総数：71名

リアル参加：31名

オンライン参加：40名

テーマ

1. ひきこもりの家族はどうする？ ゲスト：丸山康彦さん
2. 依存症・魂の回復から生きづらさを見る ゲスト：藤原秀博さん
3. 外に出なくとも就職できる～在宅勤務の可能性～ ゲスト：木村忘義さん
4. 40代からの無理しない生き方 ゲスト：山瀬健治さん
5. 未だ『人と違う』ことが武器でない社会 ゲスト：最内翔さん
6. 讓れない事・守りたい事は何ですか？ ゲスト：Tokinさん
7. ひきこもり当事者との安心できる関わりについて ゲスト：久保亘さん

アンケート結果

- とても有意義な集いでした。またの企画を楽しみにしています。音声が聞き取りにくい時が度々あったのは残念でした。
- 渦中にある当事者の立場の人たちと、家族の立場の人たちが率直に話をできるような場。難しいとは思いますが、あえて他人同士なら、実の親子ではできない話ができるそうです。

コラム

令和3年度に「リンク」開設の準備期間として話し合いを重ねていたが、いざ初年度が始まったところではまだ手探り状態の部分も多かった。その中で、それぞれの機関の特徴を説明しながらも、その2つがどのように一緒に対応を行っているのかをうまく説明するすべを探しながらの広報活動だった。

開設後は回を重ねるごとにバージョンアップを行い、伝え方を工夫してきた。そしてその伝え方を考える過程が、「リンク」の現場でのよりよい連携を考える機会にもなっていった。

今後は積み重ねてきた事例も取り入れながら、より分かりやすく、リアルに感じてもらえる広報を確立させていきたい。

第3節 「リンク」キャラクター

世田谷 ひきこもり相談窓口「リンク」
イメージキャラクター募集中!!



・・・いつか、を今、描いてみませんか?

募集期間

令和5年1月1日(日)~2月1日(水)まで

詳細はホームページをご覧ください。お問い合わせ窓口でご確認ください。



問い合わせ先：世田谷区ひきこもり相談窓口
電話：03-5432-2017 FAX：03-5432-0520

区民のひきこもりに対する理解を促進するとともに、「リンク」をより身近に感じてもらうため、イメージキャラクターを製作しました。イラストの原案を公募したところ、募集期間内に全46作品の応募があり、審査の結果、最優秀作品をキャラクターに決定しました。

募集期間 令和5年1月1日(日)から2月1日(水)

応募資格 募集期間内に世田谷区在住、在勤、在学である方

応募基準 自作未発表のもので、「リンク」の趣旨に合う名前、デザインであること

【一次審査】区が設置する選定委員会で最終候補作品（11作品）を選定

【二次審査】最終候補作品の中から、区民投票により最優秀作品候補を選定（投票数130票）

選考には家族会や当事者会も参加

そして...



※130票中、最多の**43票**を獲得！！

第五章 総括

第1節 令和4年度の取組み状況

1. 「リンク」内の協働
2. 多機関との協働
3. 相談者の思いと制度の活用

第2節 令和5年度に向けて

1. 目標とする取組み
2. スタートしている令和5年度への取組み
3. より良い支援体制に向けて

第1節 令和4年度の取組み状況

1. 「リンク」内の協働

■ 異なる2機関の視点の違い

相談者や相談対象世帯にとって「目指したい生活はどのようなものか」を軸に支援を進めていくという、基本となる支援観で2機関での「リンク」支援を進めている。関わる支援者が多ければ多いほど、支援方針の統一は難しくなる。

「リンク」の特徴は、臨床心理士等の視点を活かしてメンタル面へのアプローチを行うメルクマール、社会福祉士等の視点を活かして生活全般へのアプローチを行うぶらっとホーム両方の視点から、ひきこもり当事者さらには世帯全体にとって、より良い支援を検討することができる体制としたことである。

実際には、2機関の職員が2人ペアで面談に入ることも多い。相談者一人に対して2人がどのように話をしていくかに関しては、相談者への共通理解を深めていくと同時にペアのスタッフへの理解も図る必要があり、未だ手探りの状態が続いている。

一方で、複合的な課題がある世帯に対し、インテーク時から複数の視点で見ることができ、幅広いアセスメントに基づいた支援を展開できることは大きな利点であると感じている。

■ 情報と方針の統一化

ぶらっとホームとメルクマールという二つの異なる機関がともに一つの窓口を運営する難しさはあった。開所時間も異なり、同じ建物内でもフロアが違うため、情報の共有方法や得意とする業務の異なる機関同士がどのように支援方針を統一させるかは課題であった。その点に関しては、以下のような目的の異なるミーティングを行い、細やかにケースの共有をするように工夫した。

- ① 「リンク」検討会（実務者と所管課）：週1回（1時間30分）、新規相談者の受理など。（P.11を参照）
- ② ミニミーティング（実務者）：週2回（15分）、日々の申し送り。
- ③ スタッフミーティング（実務者）：月1回（1時間）、臨床運営上の課題の確認と改善方法。

2. 多機関との協働

■ 協議の場

複合的な課題を持つ家庭には多機関の関わりが必要となることが多く、「つなぐ」だけではなく「つながりながら協働していく」ことを大切にしてきた。それぞれの機関と情報を共有するだけではなく、今後の動きを共有し方向性を一致させるために活用してきたのが、社会福祉法第106条の6に基づく「個別ケース検討会議」である。この会議を通して、互いの情報交換に加えて、顔の見える関係を構築することにより、多岐にわたるニーズに対し、迅速、柔軟に対応できると感じている。

この会議は、当事者や家族が来所できない場合も開催が可能である。当事者や家族が相談につながっていない世帯の中には、課題がこじれ、複雑化していることが多いため、世帯に関わるきっかけとなりそうなポイントを会議で浮かびあがらせ、必要時にすぐに動けるように事前に相談しておくことが重要である。

■ 情報の共有

関わる機関が増えれば増えるほど、情報の共有は難しい。共通のシステムがあるわけではないので、刻々と変化する状況をリアルタイムに共有することはなかなか困難である。現在は情報共有のために電話を使うことが主であり、それに要する時間が課題である。

■ 役割分担

相談者の世帯状況、年齢、抱える課題は多様で、相談内容は複雑多岐にわたっている。課題を解きほぐし、解決方法を探っていると法制度の狭間の問題を抱えているなど、各支援機関の現状の役割だけでは対応できないことが出てきている。

今後の多機関協働にあっては、各機関が現状の役割に留まらず、できることを考え、狭間の問題を互いがどのようにフォローしていくのかについて一緒に考えていく必要があると感じている。

3. 相談者の思いと制度の活用

現在様々な支援ツールを使って対応を行っているが、何よりも一番大事にしているのは相談者の思いである。当事者本人、家族、それぞれに思いがあり、それを十分に理解し大切にした上で支援方針を立てなければ継続には至らない。

また、相談者は、「リンク」ができたことで初めて相談をしたと話される方も多く、相談するまでに相当の期間悩みを抱えてこられた重みを感じている。相談受付後は速やかに相談体制を整え、相談・支援が継続していく様子が配慮されている。

実際に「リンク」では家族から当事者につながった例が25件あるが、当事者本人に会って話を聞くと、周囲から聞いた印象と実際の印象が異なることがある。そのため当事者本人の思いをしっかり聞くことの大切さを改めてこの一年を通して感じている。そして、「どうなりたいか」その思いを実現することができるよう制度利用につなげていくことが、ひきこもり当事者の前向きな気持ちの変容につながると感じる。



第2節 令和5年度に向けて

1.目標とする取組み

■ 相談につながる方を増やす

- ①広く区民に「リンク」を知ってもらうための講演会やセミナーを開催する
- ②地域の支援者向けに「リンク」説明会を積極的に行う
- ③関係機関の支援者に取組みを理解し、協働をより推進するために、支援者向け説明会や研修会の開催、個別ケース検討会議の意義の浸透を図る
- ④当事者会や家族会の取組みについて意見交換をし、新たな協力体制のあり方を構築する
- ⑤全国の窓口のより良い取組みを参考にし、取り入れていく

■ 来所した方が自分らしい暮らしをできるようにサポートをする

- ①支援体制のさらなる構築と拡張を促進する
- ②アセスメントを充実させ、支援内容の評価や分析を行い、今後の支援に活かしていく

2.スタートしている令和5年度への取組み

「リンク」はぶらっとホームとメルクマールの複数の視点を活かし、的確なアセスメントを行うことが求められている。アセスメントのツールとして、令和3年度の1年をかけて帳票等の検討を行ってきたが、開設後1年が経ち、相談の実績を踏まえて帳票を見直すことになった。ぶらっとホームとメルクマール双方の視点で作成された帳票も、1年間面談を共にすることで新たに改善点がみえてきた。これは面談と方向性の検討を毎回一緒にすることから見えてきた成果でもある。

3.より良い支援体制に向けて

1年を通して窓口を運営し感じることは、ひきこもりの問題は多様であり、一つとして同じ「ひきこもり支援」というものはないということである。家族構成や家族関係、経済的な問題や体調面など、どれか一つだけに対応するのではなく、総合的に判断をすることが重要である。そのため、令和5年度も関係機関と連携し、それぞれの専門性を有効活用しながら個別ケース検討会議を開催していく。

また、様々なニーズにこたえるために、今まで以上の多くの関係機関とつながり、地域資源の開拓も行いながら、制度の狭間を埋め、ひきこもり当事者やその家族の方が安心して自分らしい生活ができるような支援に努めていく。



電車 東急田園都市線「三軒茶屋」駅 徒歩3分
東急世田谷線 「三軒茶屋」駅 徒歩2分

バス 世田谷通りから渋谷方面行「三軒茶屋」
徒歩1分

※駐輪場・駐車場はありません。

世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」 令和4年度 事業報告書

令和5年6月7日 発行

編集・発行

世田谷区生活困窮者自立相談支援センター
(ぶらっとホーム世田谷)

事業運営

社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会
公益社団法人 青少年健康センター【茗荷谷クラブ】

所在地

〒154-0004 世田谷区太子堂4-3-1 STKハイツ3階
TEL 03-5431-5354
FAX 03-5431-5357

「リンク」HP

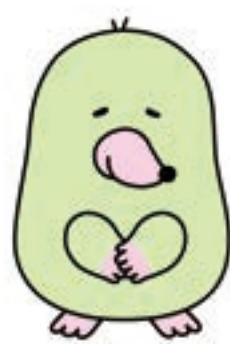
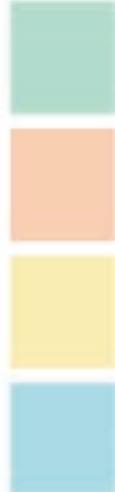
https://platsetagaya.jp/hikikomori_soudan



製作

COMOLY





| 世田谷
ひきこもり相談窓口「リンク」